

南の島のクリスマス

三浦裕子

南の島。適度に海風が入るホテルの一室。簡易ベッド。ロミロミ・マッサージ。思う。ああ、畳の上で死にたいなんて思わない。ここ、ココでいい。否、ココがいい……。

三〇歳前後の無口な女性だった。ほんとうに最低限のことしか言わない。ひよっとしたら、日本人だから言ってもわからない……と思っていたのかもしれない。ひたすらに、マッサージ。黙々と。ロミロミ、ロミロミ……。最初に、最低限以上のことを言ったのは、私のほうだった。どこの出身で、この島に来てどれくらいなのか、と聞いた。白めの肌、ブロンドの髪。この島の人には到底見えない。だから、聞いた。マサチューセッツ出身で、ここに来て五年目だと答えた。またもや、シンプルに。でも、決して無愛想という感じではない。

「マサチューセッツですか……こと違って、寒い所ね。私、二年前の冬、ボストンに旅行したのよ。二月に。二月だったから、寒くて寒くて……」と、話を続けた。すると、

「二年前？ 去年でしょ。あなたボストンに行ったのって去年だわ……。去年、ラスト・イヤーよ」

去年？ いや、もっと前だった……と思った。そう思ったけど、まあ、どっちでもいいや……。それ以上、その話を続けなかった。ボストンに行ったのがいつだったかより、今受けているマッサージのほうに、大事、大事……。ああ、気持ちよい。

「アー・ユー・ア・ライタ……」

突然彼女の声があった。えっ何？ ライ、ライ……？？ あまりの気持ち良さで、半分意識が遠のいていた。ええっ、今、なんておっしやいましたっけ？

「パードン・ミー」

「アー・ユー・ア・ライター……」

「ハア？ ライ？ ライター？ これは、まさにヒヤリング力の問題だ。能力不足の場合は、想像力を働かせるしかない。「アー・ユー・ライト・ハンド」と言ったのかも……？ でも、あなたは、右手つと聞かれても、私は「右手」ではない。ええい、もう一回聞こう。「パードン・ミー・アゲイン」

「アー・ユー・ア・ライター……」

また同じに聞こえる。ただ今度は、そう言って、うつぶせで寝ている私の手のひらをちよん、ちよん、つとノックする。

「はーん、ライト・ハンダーって言ったのね、そうよ、そう、その通り、私は右利き。イエス……、そう答えかけて、まだ刺激が残る、ちよん、ちよん、とされた手のひらを動かした。違う、これは左手、左よ……。もしかして、今こうしてうつぶせに寝てるから、私の左手は、彼女にすると右手に？？ いやいや、そんなわけではない。うつぶせでも、仰向けでも、私の右手は、私の右手。彼女から見ようが、誰から見ようが、そうなはず！」

ほんの一瞬の間に色々なことを考えた。でも、やっぱり、わからない……。

沈黙。すると、今度は、

「ユー・アー・ライター」と、語尾を下げ、短く言い切った。そして、またもや、左手をちよんちよん。

その左手を動かしながら、「ザッツ、マイ・レフト・ハンド……」うつぶせのまま、ベットに敷かれた白いタオルに向かって、うめくように、そうつぶやいた。タオルの繊維に吸収されて聞こえないかもしれないような小さな声で。

「イエス、ザッツ・ユア・レフト・ハンド。イツ・セズ・ユー・アー・ライター」

「ええ、なんですって？ ライターって、私がライター……。そう、おっしゃいました？」

電源が入ったようにしゃべる私。こんなに英語がしゃべれたんだ、やればで

きるじゃん……と、ちらちらと、冷静な自分に戻りながらも、私の頭と口は「ライター」の一言に食いついた。

ノーよ。ノーです。でもね、確かに「ライター」と関係のあることをしているわ。とつくの昔に死んだアメリカの作家を研究しているの。その人の本を読んで、いろいろ調べている。でもそれだけ、それだけよ。私自身は書いてはいない。だから、ライターじゃないの。

それにしても、どうして、私がライターだなんて言ってくれるのかしら……。ライター、ライター。ライター……。どうして……。彼女のこの言葉に静電気よろしくまとわりつく私。その理由は、誰よりも自分が知っているけど……。

ライター。物書き。かつて、あこがれた職業。でも、あきらめた。所詮無理。そんな世の中は甘くない。否、世間がどうの……というより前に、自分にはそんな能力はない、と。物書きになろう……なんて、とんでもない。やーめた！と、潔くあきらめた。

どう考えたって無理でしょう……。だって、書けるような、そして、人に深い感動を与えられるようなそんなドラマチックな経験なんて、何一つしてないのだから。大恋愛も、大失恋も、地獄を見るような悲惨で非凡な体験も何もない。そうありたいと願ったわけでもないけど、苦労知らずで、家族の愛情も充分にもらい、ただ平々凡々にのんのんと生きてきた。自慢じゃないけど、お金にも困っていないし、過去に困ったこともないわ。そんな私。そんな人間に何が書けようか……。仮に書いたとして、一体誰が読む？

なれるわけがなかるうに……。と、そう思ってあきらめた。下手にチャレンジして、やっぱりダメでした……。というのは御免だ、それだけは避けたい。だから、あきらめた。努めてドライにあきらめた。……。なのに、今頃になって、ユー・アー・ア・ライター、とは、どういうことなのっ？ どうしてそんなこと言うの？ 寝た子を起こす、とはこのことぞ！

ちやうど、研究者には不向きだと思っていた頃だった。文学研究者にとって絶対のスタンス、新しい読み方を追求する、これには、どうしてもついて行け

なかった。どうしてあれほどまでに、文学鑑賞にあれこれと理論付けをし、斬新な読みを試みるのか。それが、全く納得できなかった。だが、文学研究を志す者が、この点で、折り合いがつかないとなると、かなり致命的だ。そのことは、痛いほどわかっていた、だから、必死に妥協しようとした。でも、もう限界。黄色信号の点滅の間隔が日増しに短くなる、そんな頃だった。

そう、まさにそんな時だった。「ユー・アー・ア・ライター」の一撃に遭ったのは。だから、余計に食いついた……。何度も言ったし、聞いた。今、作家の研究をしているけど、決して、決して、私自身は作家ではない。そりゃあ、なれるなら、なりたいと思ったことはある、あるけど、あきらめたわ、とつくの昔に、すっかりと。でも、あなた、今、ユー・アー・ア・ライターって、言ったわよね。

にっこり笑って答える。「ユー・キャン・ライト・ユア・ストーリー」。私？ 書く？ 書けるの？ しつこいほどに、繰り返して聞いた。そのたびに、「ユー・キャン・ライチュア・ストーリー」そう答えた。

その旅から、もう、七年が経つ。たかが、旅の一日、そのほんの一時の出来事。夢ではないにしろ。それに一生を振り回されるのも如何なものか……。そして今、振り回されたつもりはないにしろ、研究者の道は自らで閉ざしてしまった。かと言って、ライターの道に向き合うこともしてない。

それにしても、忘れられないあの出来事。今でもあの衝撃のせいで、いつも心が揺れている。書こうか、書いてみようか、でも、結局書かずのまま今日まで。

マッサージを終え、チャージとチップを手渡した、ドアのところまで、サンキューとサヨナラのハグをした。その時、ダメ押しで、もう一度聞いた。書けるのか？ 書く人になれるのか、と。にっこり、うなずいた。最後に、ずっと聞きそびれていた彼女の名前を聞いた。「クリス」一言そう答え、後ろを向いた。後姿のまま、一回手を振り、廊下の向こうに消えた。

最近わかった事実がある。例のボストンのことだ。クリスマスに会ったのが、秋で、私がボストンに行ったが、その直前の冬ではなかったもので、あの時、「二年前」と言ってしまったのだが、落ち着いて考えると、間違い。クリスマスと会ったその年を軸にすると、「去年」でした。確かに、「去年」。クリスマスのおっしやるとおり、「ラスト・イヤー」。

(了)